

台湾人女性から見た 北海道観光の「魅力」



邱 琚雯 (Shwu-Wen CHIOU)

台湾南華大学亜太研究所教授

台湾台北市出身。台湾大学政治学科卒業、一橋大学社会学博士。台湾南華大学亜太研究所教授。主な著作に『性別與移動：日本與台灣的亞洲新娘（増訂一版）』（2005、台北・巨流出版社）、『日本流行文化在台灣與亞洲II』（編著）（2003、台北・遠流出版社）。翻訳『日本人論：從明治維新到現代』（2003、台北・立緒出版社2007、桂林・廣西師範大學出版社）、『八重山の台湾人』（2012、台北・行人文化實驗室）。

はじめ

私は長い間「ジェンダーと観光」を大学での研究と授業の柱として積極的に取り組んで、特に女性旅行者及び女性観光従業員の眼差しを通して、異文化の相互認識・イメージがいかにして作り上げられているのかに焦点を当てて、このメカニズムを解明する作業を中心にやってきた。近年、既に「ミレニアム以降日本人女性の書いた台湾紀行文の内容分析」（邱琚雯2006）を発表し、「ミレニアム以降台湾人女性の書いた日本紀行文の内容分析」（邱琚雯2010）を台湾国家科学委員会の2007年度研究計画として完成させた。そして、「台湾東部の太魯閣国家公園・民宿・先住民保留地におけるタロコ族^{※1}女性先住民インタープリターから見たホスト・ゲストの相互作用」という視点（邱琚雯2008）に基づいて、既に発表した学術論文^{※2}もある。

その後、「女性旅行者の眼差しと異文化イメージ」のさらなる比較研究のため、私は「戦後アジア人女性の書いた日本紀行文の内容分析」を進める中で、日本国内の出版物（主に日本語に訳されたもの）を模索してきた結果、そのほとんどは欧米人女性の作品であり、さらに幕末から明治・大正時代までのものが多かったことが分かった。その上、日本人が欧米人女性の書いた日本紀行文を研究対象として、「異文化交流史」「比較文学」「民俗学」などの分野で学術研究を活発に行っていることも判明した。例えば、19世紀イギリスの女性旅行家イザベラ・バードの名作『日本奥地紀行』については、加納孝代（1995、1987）、赤坂憲雄（2006）、宮本常一（2002）がそれぞれの専門的な視点で研究してきたことが分かる。

それに対して、日本国内における現代アジア人女性の書いた日本紀行文及びそれに関連する学術研究は、全くと言っていいほど欠如しているのではないだろうか。しかし、これまで日本語に訳されたアジア人女性の書いた紀行文がほとんどないにも関わらず、ここ数年、台湾、韓国、香港から日本への女性（中高年から若年まで）旅行者が増加している。このような背景に

※1 タロコ族 ((Taroko, Truku)

台湾の東部に居住する台湾原住民の一部族。中国語「太魯閣族」。

※2 The labor image of aboriginal female in tourism : Interpreters' annotation over the interaction between host and guest.

は、日本に旅したことがある台湾人女性によって書かれた紀行文が次々と中国語で出版されていることが関係している。しかし、筆者の研究結果から見ると分かるように（邱琨雯2010）、その内容のほとんどは「ガイドブックのような、感性豊かなエッセイ」に止まり、奥深い紀行文や紀行文学のレベルにまでは至っていない。これらの書籍は、上記欧米人女性の作品に比べると、日本人に認められ、日本語に訳され、更に日本で出版されるまでの完成度には至っていないだろう。だからと言って、こうした書籍が提示する台湾人女性の日本認識・日本観が全く不毛とは限らない。例えば、こうした書籍からは、台湾人女性旅行客が日本びいきの情緒から日本人女性の優雅さ、色気、女らしさなど外見の特徴を丁寧に描写し、憧れを表し、高い評価を与えていることを随所に読み取ることができる。

確かに偶に日本に旅行する人にとっては、出発前上記の紀行文をざっと読むのが多少参考になると思われる。しかし、長年「日本・日本人・日本語・日本文化」と付き合っている私からすれば、「ガイドブックのような、感性豊かなエッセイ」などの紀行文が到底満足するほどのものではない。これらの書籍に何か物足りなさを強く感じている私は、度々日本に旅して何を追い求めるのか、私の目に映った日本の風景は上記の紀行文の著者たちの眼差しとどう違うのかを、自分にもよく問いかけるべき課題である。今回北海道の滞在及び観光の実体験を通して、北海道観光の「魅力」を自分なりに掘り下げて、この答えを探したい。

北海道に行くまで

2012年7月、約1カ月間、私は北海道大学の教育学部に短期滞在した。この目的は「邂逅の美しさと哀しみと～北海道の日本人女性観光従業員から見た台湾の女性旅行客～」という研究課題を実行するためである。研究調査の傍ら、一人の旅人として北海道の美しい風景と豊かな風味を満喫したい気持ちも当然あった。実は、15年前すなわち1997年の夏、博士号の学位を取得

し台湾に帰国する直前、一人で道南の函館・昭和新山・洞爺湖などに旅したことがある。当時、使ったガイドブックは未だに捨てられず、書斎の本棚で静かに眠っている。15年前買ったもののため、やや古びてはいるが、ページをめくればめくるほど過去のいろいろな思い出や北海道の美しい風景が生き生きと甦る。

しかし、やはり15年前に買ったものはちょっと古すぎやしないかと思い、つい台湾現地で出版された最新の中国語版のガイドブックを探しにいった。それでもまだ満足できない私は、台北市内に日本語の専門書店や日本語の書籍・雑誌を扱う本屋に次々と足を運んで、最新の北海道観光ガイドブックを読み漁る。これは旅人としての出発前の一つの醍醐味だ。だが、中国語や日本語を問わず、一般向けの観光ガイドブックを楽しく読むではいたものの、何だか15年前のものと同様のもの、またそれぞれの各情報誌の差異・相違がさほど大きなものではないことを実感した。つまり、過去と現在、どちらの各誌も似ているような「グルメ・ホテル・観光地・観光路線の情報」しか載っていないことが、一目見ただけではっきりと分かってしまった。

したがって、一般向けの観光ガイドブックのものに到底満足できず、すぐ飽きてしまった私は、迷わず北海道とゆかりのある、なおかつ作品が既に台湾で翻訳・出版された日本人作家・林芙美子（稲妻、放浪記）、渡辺淳一（失楽園、化粧、化身、白夜）、三浦綾子（氷点）、小林多喜二（蟹工船）などに関連する記事と情報に転じて目を向けていった。つまり、出発前「北海道－文学－作家－観光－北海道イメージづくり」の一連の作業を書籍とインターネット情報を通して、私は既に少しずつやり始めたということである。

例えば、戦前の朝鮮、満州、仏印、シンガポール、ジャワ、ボルネオの各地に滞在した経験がある林芙美子の作品を私は2、3回にわたって大学院のゼミで院生たちに講義するくらい、彼女の波瀾万丈の人生と異色の作品にすっかり惹かれてしまった。その背景に基づいて、林芙美子と北海道との繋がりを考えてみると、私

は彼女の書いた「摩周湖紀行」という美文に好奇心を持っていて、自然に親しみを感じる。さらに、彼女と北海道の大地との関係もいろいろインターネットで検索してみた。例えば、昭和17年8月、彼女が美唄の町を想いのままに綴った詩を原書のまま建立した黒御影石の碑は、現在美唄市の中心部、中央公園と向かいあった市役所前庭にどっしりと建っているということも初めて知った。

要するに、今年の7月北海道に来るまで、私は一研究者として、また一女性旅行者として、自分なりに北海道という観光地に関する予備知識を少しずつ蓄えてきた。今回の旅はこれらの予備知識を検証するために、北海道に渡ったとも言えるであろう。

北海道に着いた後

初夏の札幌に着いた翌日、私は早速JR札幌駅の観光総合案内所で現地の観光地図とパンフレットをいろいろと入手して、好きな場所と名所を検索して、読んだ。時間と場所の制限もあって、結局今回の滞在は主に札幌市内、小樽市、道東の三つだった。

(1) 札幌市内

札幌市内については、まず、調査研究のために私は台湾人観光客がよく集まる観光スポット、例えば赤レンガ庁舎、大通公園、白い恋人パークをはじめ、薬局、100円ショップ、ヨドバシカメラなどの買い物拠点にも足を運んで観察を毎日少しずつやった。

最も真剣に見学を行ったのは、着いた三日目にすぐ訪れた渡辺淳一文学館である。涼しい初夏の小雨の昼下がりに観光パンフレットを手持ち、外国人旅行者一人でもかなり気楽に行きやすい所であるが、少しの達成感（無事に目的地に着くまで）が得られたに違いない。閑静な住宅街に建てられているこの文学館の館内に入ると、渡辺の生涯・活動に関する展示及びそれぞれの作品（新聞連載、エッセイ、小説、映画、テレビドラマ、映像）に目を奪われたほどとても豊富であっ

た。中でも特に外国人の見学者にとって、大変参考になるところは、現在台湾各地域にゆかりのある特定の作家のミニ文学館や文化会館をあちこちで建設することを思い出させてくれるところである。文学館や文化会館を各地に建てるのは国家の文化政策であり、また一つの流行にさえ見られるこの現象をどう見るべきか。立派な建物を建てること自体は難しくはないが、館内の資料・史料・展示・解説・保存の工夫をさらに凝らすことが必要であろう。私にとって渡辺淳一文学館を見学することが、読者及び一大ファンとしての長年の願いがようやく叶っただけではなく、自分の出身社会の文化政策とその実績を反省する有効な材料として、貴重な体験をさせてもらった。

私は基本的に賢いショッピングや買い物が好きな人間で、7月の中旬から札幌駅の大丸、東急、近くの三越、丸井などのデパートが既にバーゲンのシーズンに入っていることを知り、買い物の快楽と快適さを一層味わえることとなった。上記のデパートのすべてでお客様へのサービス対応がかなり丁寧で、観光客として本当に買い物の楽しみを存分にエンジョイしていた。例えば、試着しようと思う洋服を店員さんをお願いすれば、いつでも気楽に試着できる。つい最近まで足底筋膜炎を発症していた私は、クッション性の高い良質なウォーキング・シューズを探すのにかなり苦労してきて、あちこちの店で何足ものシューズを履いてみた。それにもかかわらず、店員さんが面倒くさく、嫌がるような素振りを一切表に出さずに、いつまでも笑顔で優しく接してくれた。勘定を済ませた後、店員さんが品物のバッグを持ってくれ、店頭の外まであるいは降りるエレベーターまでお客様を見送ってくれ、相手をもてなし喜ばせるサービスの根幹ともいえるホスピタリティを、私は温かく実感させてもらった。最も品質が良く、かつデザイン性も良く、ややお洒落なウォーキング・シューズをようやく帰国前に見つけて、一つの達成感さえ感じる喜びで二足を購入してきた。

(2) 小樽市

次の小樽については、大学院時代からずっと付き合い、もうすぐ出会ってから二十年が経つ日本人女性の友人が今回の同行者であり、最高かつ最良のガイドさんでもあった。彼女に連れていってもらったからこそ、私は小樽の日帰りの小さな旅に格別の楽しさと発見の面白さをしみじみと味わってきた。

まず、友人が事前に調べた「にしん御殿小樽貴賓館」に向かった。この貴賓館は旧青山別邸また北海道屈指の美術豪邸として、地元によく知られている名所でもある。小樽駅の情報案内所で入手した最新の日本語パンフレットも、貴賓館までの交通手段と観光路線の詳細を載せている。これを参考にしながら、私と友人は海岸線の傍の小さなバス停に降りてから、炎天下の午前、上り坂をゆっくりと登って目的地に移動した。ほとんどの観光客が大型観光バスや乗用車に乗ってやってきたようで、私たちみたいに歩いてきた人があまりいないのではないかなどとつぶやいていた時、玄関の入り口で東南アジア系の4人の若い観光客らを偶然に見た。入館料はやや高いが、館内の見事な展示や大作・名作及び素材や建物自体など確かに見所が沢山あって、申し分のない贅沢なアート三昧の旅になった。

程なくして日曜日の昼間に小樽市内に戻ってきた私たちが、運河の方面に歩いていると、賑やかな商店街のはずなのに、シャッター通りの寂れた雰囲気はどこか重く漂っているような光景に圧倒されてしまった。運河の周辺にさらに近付いていくと、ようやく少し活気が溢れている寿司屋通りに着いた。豚カツ定食を売っている珍しい食堂で簡単な食事を済ませた後、すぐ近くに位置する小樽市立文学館に入った。小樽運河の浅草橋から国道5号に向かう道沿いに建つこの文学館では、小樽にゆかりの深い作家の小林多喜二や伊藤整、歌人石川啄木などの貴重な直筆原稿や遺品などの資料を紹介しているのは言うまでもないだろう。だが、私が心を惹かれたのは、文学者の展示品そのものではなく、友人からの薦めもあって見た、日本を代表する

音楽評論家吉田秀和（1913–2012年）の若き小樽時代の軌跡に関するものであった。音楽評論の道に進み、その知性と鋭い感性で、バッハ、モーツァルト、ベートーベンなどのクラシック音楽を、独特のやわらかい筆致で紹介し多くのファンに支持された吉田氏のような音楽評論家が果たして台湾にもいるかしら。展示を見ながら、この素朴な質問が最後までずっと私の頭から離れなかった。恐らくクラシック音楽というのは、台湾の一般的民衆にとって高嶺の花みたいな存在で親しみやすいものではないし、庶民の分かりやすい言葉でクラシック音楽を解説・普及する地道な作業を長年コツコツと進めた人間がいるはずもないであろう。この異文化との出会いは、自文化を顧みる絶好なチャンスであることを改めて実感した。

小樽市立文学館と同じ建物にある小樽市立美術館には、よく知られている日本を代表する風景画家・中村善策や版画家・一原有徳の作品などを収蔵しているが、当日、丁度「心の原風景-風土への賛辞・木嶋良治展」も開かれていた。故郷小樽やオホーツク沿岸の海辺など北海道風景を中心に「北方性」と「雪」をテーマとして描き続けてきた木嶋良治（1936年小樽市生まれ）の作品は、南国出身の私にとって、北国の冬の原風景を静かに鑑賞できる、贅沢すぎるものであった。

今回、日帰りの小樽の旅は飽きずに終わったが、この特別な良い思い出がそのまま残っていた。もし、私が台湾人向けの中国語観光ガイドブックに頼るだけだったら、またもし友人が同行していなかったら、大衆観光の物足りなさ及びつまらなさしか体験できなかったであろう。確かに、「行きやすい、分かりやすい、食べやすい、親しみやすい」など旅行を主にして紹介するガイドブックに頼るのが、命の洗濯を一時享受できるかもしれない。大勢の観光客で埋められた小樽運河の周辺の観光地がその代表である。もちろん、世の中の平凡と人並みが決して悪いことではなく、人波に流されるのもやや面白い経験であるかもしれないが、心の底に残る味深いものがやはりちょっと少なすぎ

る、と強く実感した。

(3) 道 東

道東のツアーは、本当に待望の旅である。なぜなら、1カ月の短期滞在とはいえ、私はほとんど北大のキャンパス、札幌市内のデパート及びその周辺地域をうろろしているだけで、北海道の美しく広大な自然エリアの景観に親しむチャンスが全くなかったことが、誠に残念だからである。したがってまず、私はJR発売の周遊券やネットでツアー旅行の観光情報をいろいろ聞いたり調べたりした。結局、一泊二日しかも添乗員付き、札幌出発の現地ツアーを選んで参加することにした。外国人の私にとって、これはほっとするいい結果かもしれない。しかも今回、地元の女子大学に勤務している日本人女性の友人も同行したので、心細さと寂しさを一気に紛らわすように楽しんだ。

朝一の集合時間より早めに札幌駅「鐘の広場」に着いた私は、年金生活者の男性が今回のツアーの添乗員であることを知ってやや驚いた。折り目正しく、端正な背広姿で、NHKラジオの深夜番組に出られるほど美声のアナウンサーのような60歳代の男性が目の前に現れた。彼がいてくれたからこそ、二日間の旅をより安心して、より楽しく過ごさせていただいたのではないかと、顧みて幸運かつ感謝の気持ちで一杯であった。

初日の暑い午後、大変有名で日本最大規模のラベンダー畑・ファーム富田に辿り着いた。大型の観光バスが停めた駐車場を降りた瞬間、人波にさらされた緊張感と圧迫感が確かに重苦しかった。しかし間もなく、ここでしか見られない贅沢な美しい眺めを楽しく満喫でき、ラベンダー・ソフトアイスクリームを美味しく食べられたことは、非日常の短い一時に至福を享受し尽くしたなあ、と小さな幸せに温かく包まれていた。

夕方頃、ようやく阿寒湖地域に入った。すぐ添乗員から阿寒湖遊覧のモーターボートに乗ろうと勧められ、たった3分間の湖上遊覧だが、壮麗な阿寒岳を眺める素晴らしい経験を確実にさせてもらった。翌日の早朝

4時半頃、私は一人で秘かにホテルの玄関を出て、阿寒湖の奇麗な日の出を待っていたが、もう二人のカメラマンが既に静かな湖畔に立っていた。徐々に明るくなる東の空の下に神秘の湖から昇るご来光は見る人々に大きな感動を与えてくれ、今回の道東の旅の最高の見所であり、一生忘れられない光景としてしっかりと目に焼き付けられた。ホテルの周辺に点在している何処でも似ているようなお土産の売店では、中国語とハングルの看板が目立っていて、中国語映画『非誠勿擾』（日本語題名「狙った恋の落とし方」）の台湾人女優・舒淇が来店した時の写真も大きく飾られていた。これを見て、映画のロケ地が観光誘致のイメージ作りとの連携を通して、両者の相乗効果がかなり生まれているということに改めて実感させられた。

引き続き、観光バスが北国の広い大地を走って摩周湖に向かっていった。当日は、観光客が高い展望台から霧の名所として知られる摩周湖をぼんやり見下ろすことが出来、自分がまさに千載一遇のチャンスに恵まれた幸運の寵児ではないかと嬉しくなった。その後、人ごみに溢れた釧路湿原ノロッコ号に乗って終点に着いた後、釧路和商市場で「勝手井」マークのお店で勝手井の具材を購入し、即座に食事を済ませた。それは台湾の伝統市場の中によくある光景と似ている。つまり、安くて美味しくて具が多い料理のお店が庶民の台所として長年愛されていることを鮮やかに彷彿とさせている。

*

1カ月の北海道の滞在はやや短い、心残りなく無事に終わってしっかりと記憶に焼き付いた。日本に旅して何を追い求めるのか、私の目に映った日本の風景はこれまでの紀行文の著者たちの眼差しとどう違うのか、という素朴な問いかけに対して、今回は北海道の滞在及び観光の実体験を通して、北海道観光の「魅力」を私なりに掘り下げ、北海道の思い出を私なりに作ることができた。